

平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点 (地理歴史・日本史B)

1. 今回の調査結果のポイント

【ペーパーテスト調査】

<歴史の考察>

- 現行学習指導要領において新設された大項目である「歴史の考察」では、通過率が設定通過率を上回る又は同程度以上（以下、「と同程度以上」という）と考えられる問題数が8問中6問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。
- 視覚的な資料を用いた問題では、通過率が設定通過率を上回ると考えられ、文字資料の読解を必要とする問題では、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

<原始古代の社会・文化と東アジア>

- 「原始・古代の社会・文化と東アジア」では、すべての問題について通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる。

<中世の社会・文化と東アジア>

- 「中世の社会・文化と東アジア」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数が8問中6問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。
- 経済や文化が多様化する室町時代に関する問題で、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

<近世の社会・文化と国際関係>

- 「近世の社会・文化と国際関係」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数が10問中8問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。
- 「関心・意欲・態度」の評価の観点については、自分の関心に基づいて主体的・積極的にテーマを選び解答させる問題で、通過率が設定通過率を上回ると考えられる。

<近代日本の形成とアジア>

- 「近代日本の形成とアジア」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数が10問中9問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。
- 複数の資料から歴史的事象の特色を読み取って表現させる問題では、通過率が設定通過率を下回ると考えられ、複数の資料を基に総合化、概念化する力に課題がみられた。

<両世界大戦期の日本と世界>

- 「両世界大戦期の日本と世界」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数が8問中1問であり、全体の問題数の半数に満たなかった。
- 自分の言葉で適切に表現させる記述式問題で、無解答率の比較的高い問題が多くみられた。

<第二次世界大戦後の日本と世界>

- 「第二次世界大戦後の日本と世界」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数が6問中4問であり、全体の問題数の半数以上を占めた。

【質問紙調査】

- 「日本史の勉強は大切だ」など日本史の学習に対する生徒の意識について肯定的な回答は前回調査より増加の傾向がみられた。
- 教師質問紙調査では、「博物館や郷土資料館等の地域にある施設を活用した授業を行っていますか」や「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」などの質問に肯定的な回答をした教師の割合は10%にも満たなかった。
- 大項目「歴史の考察」の中項目「地域社会の歴史と文化」については、「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師の割合は70%以上であるが、「好きだった」と回答した生徒の割合は約20%であった。

2. 今回の調査結果の特色

(1) 現行の高等学校学習指導要領（平成11年告示）の改訂の要点等

平成11年告示の高等学校学習指導要領・地理歴史科では、従前の基本的な科目構成を維持しつつ、各科目の特質を生かして内容を厳選するとともに、各科目で主題学習による内容を工夫し、また科目内で内容を選択して学習する仕組みを一層拡充して重点を置いて学習できるよう工夫している。

「日本史B」の内容構成において改善された点は、第1に、歴史への関心を高めるとともに、主題を設定し追究する学習を充実し歴史的思考力の育成を一層重視する観点から、大項目として「(1) 歴史の考察」を設定したこと、第2に、世界史的な視野に立って総合的に理解させる趣旨を一層明確にしたこと、第3に、通史的部分に22あった中項目を17に統合し、それぞれの時代を大きく総合的にとらえられるようにしたことである。

こうしたことから、従前と比べて科目の内容が異なっており、教育課程全体の変化と相まって、各学校における生徒の履修状況も大きく異なっていることが考えられるため、前回調査と同一問題の結果をみる際には留意する必要がある。

(参考) 履修学年

| 調査年度（科目名） | 1学年 | 2学年 | 3学年 | 1・2学年 | 1・3学年 | 2・3学年 | 1・2・3学年 |
|--------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 平成15年度（日本史B） | 2.4% | 14.4% | 39.8% | 0.4% | 0.2% | 41.2% | 1.7% |
| 平成17年度（日本史B） | 0.8% | 15.5% | 33.6% | 0.6% | 0.4% | 45.6% | 3.4% |

(2) ペーパーテスト調査結果の主な特色

① 過去同一問題についての分析

前回調査（平成15年度調査）との同一問題の通過率を比較すると、通過率が前回は有意に上回る問題及び前回は有意に下回る問題はなく、同一問題18問中すべての問題が、前回と有意に差がない。

| 全問題数 | 同一問題数 | 前回は有意に上回るもの | 前回と有意に差がないもの | 前回は有意に下回るもの |
|------|-------|-------------|--------------|-------------|
| 60 | 18 | 0<0.0%> | 18<100.0%> | 0<0.0%> |

前回と今回の無解答率を比較すると、無解答率が前回は上回っているものは同一問題18問中16問であり、全同一問題数の半数以上を占めている。例えば、電化製品の写真から技術革新が国民に与えた影響を考察させる問題[B7(3)]は、前回の無解答率13.7%に対して、今回は21.6%と上昇しており、すべての問題のうち上昇幅が最も大きい。

② 内容の項目別にみた分析

全体としては、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、60問中44問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。内容・領域別の状況は以下のとおりである。

| 大項目 | 問題数 | 上回ると考えられるもの | 同程度と考えられるもの | 下回ると考えられるもの |
|----------------------|-----|-------------|-------------|-------------|
| (1) 歴史の考察 | 8 | 4<50.0%> | 2<25.0%> | 2<25.0%> |
| (2) 原始・古代の社会・文化と東アジア | 10 | 5<50.0%> | 5<50.0%> | 0<0.0%> |
| (3) 中世の社会・文化と東アジア | 8 | 4<50.0%> | 2<25.0%> | 2<25.0%> |
| (4) 近世の社会・文化と国際関係 | 10 | 5<50.0%> | 3<30.0%> | 2<20.0%> |
| (5) 近代日本の形成とアジア | 10 | 5<50.0%> | 4<40.0%> | 1<10.0%> |
| (6) 両世界大戦期の日本と世界 | 8 | 0<0.0%> | 1<12.5%> | 7<87.5%> |
| (7) 第二次世界大戦後の日本と世界 | 6 | 3<50.0%> | 1<16.7%> | 2<33.3%> |
| 合計 | 60 | 26<43.3%> | 18<30.0%> | 16<26.7%> |

<歴史の考察>

「(1) 歴史の考察」は、歴史の基本的な考察方法を理解させるとともに、主題を設定して追究する学習、地域社会にかかわる学習を通して、歴史への関心を高め、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることをねらいとして、現行学習指導要領において新設された大項目である。

この大項目では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、8問中6問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

「ア 歴史と資料」の写真資料や絵画資料を比較してそれらの時代順を特定する根拠を表現させる問題 [A1] (1)、近世大坂の地図資料から大坂の都市としての特色を読み取らせる問題 [B1] (1) など視覚的な資料を用いた問題では、通過率が設定通過率を上回ると考えられるが、文字資料を読み取って文化財の歴史的意義を考察させる問題 [B1] (2) では、設定通過率60%に対して、通過率49.6%と下回っており、無解答率も30.1%である。

「イ 歴史の追究」の沖縄と東京に関する資料を比較して地域的差異の背景を考察させる問題 [A1] (3) では、設定通過率45%に対して、通過率33.6%と下回っている。

この大項目では、複数の資料を関連づけて考察する力や地理的な知識や技能を用いて考察する力に課題がみられる。

<原始・古代の社会・文化と東アジア>

「(2) 原始・古代の社会・文化と東アジア」では、10問のすべての問題について、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる。

この大項目は、通史学習の最初の内容・領域であり、比較的理解されやすいと考えられる。その一方、無解答率の比較的高い問題もみられ、大仏造立の詔の目的を略年表から考察させる求答式の問題 [B2] (3) では、設定通過率55%に対して、通過率57.6%と同程度であるが、無解答率は27.1%である。

<中世の社会・文化と東アジア>

「(3) 中世の社会・文化と東アジア」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、8問中6問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

室町時代の交易の特色に対する関心や理解を問う問題 [A3] (3)、日明貿易に関する理解を問う問題 [B3] (2) では、通過率が設定通過率を上回ると考えられ、琉球を含む東アジアの交流について理解されていると考えられる。

雪舟に関する略年表をみて応仁の乱の影響が文化にまで及んでいたことを読み取らせる問題 [A3] (4) では、設定通過率60%に対して、通過率36.7%と下回っている。また、柳生の徳政碑文から徳政一揆のねらいや成果を読み取って農民の立場から表現させる問題 [B3] (3) でも、設定通過率45%に対して、通過率36.0%と下回っている。室町時代の政治について経済や文化と相互に関連させて理解する力が不十分であると考えられる。

<近世の社会・文化と国際関係>

「(4) 近世の社会・文化と国際関係」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、10問中8問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

江戸時代の庶民に読書が普及した背景に関心をもちその理由を資料から読み取って表現させる問題 [A4] (5)、江戸時代の庶民文化について関心をもって課題を設定させる問題 [B4] (4) では、通過率が設定通過率を上回ると考えられ、身近に接しやすい文化と関連させて考察する学習が定着していると考えられる。

江戸時代の対外交流に関する理解を問う問題 [A4] (2) では、設定通過率50%に対して、通過率42.7%と下回っている。朝鮮使節を迎える窓口となった藩または町として、「日本と朝鮮との橋渡しの役割をになった対馬藩」(解答類型4)が正答であるが、誤答である「中国やオランダとの貿易の拠点となった長崎の町」(解答類型3)の反応率は

34.0%であり、鎖国下の対外関係について固定的、一面的にとらえがちではないかと考えられる。

＜近代日本の形成とアジア＞

「(5) 近代日本の形成とアジア」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、10問中9問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

この大項目は近現代史学習の最初の内容・領域であり、時代の転換期をさまざまな面から考察する学習が定着していると考えられる。

複数の資料から大日本帝国憲法の特徴を読み取って表現させる問題 [A5] (2)] では、設定通過率60%に対して、通過率51.6%と下回っており、複数の資料を基に総合化・概念化する力に課題がみられる。

＜両世界大戦期の日本と世界＞

「(6) 両世界大戦期の日本と世界」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、8問中1問であり、全体の問題数の半数に満たない。

この大項目では、無解答率の比較的高い問題が多い。軍縮政策を統計資料に基づいて考察させる問題 [A6] (1)] では、設定通過率55%に対して、通過率37.8%と下回っており、無解答率も35.4%とすべての問題のうち最も高い。また、昭和初期の政党政治の終焉に関する理解を問う問題 [B6] (3)] では、設定通過率50%に対して、通過率35.4%と下回っている。正答は犬養毅内閣の終焉の説明(解答類型4)であるが、誤答である第3次近衛文麿内閣の終焉の説明(解答類型1)の反応率が11.7%、第1次大隈重信内閣の終焉の説明(解答類型2)が17.7%、第2次西園寺公望内閣の終焉の説明(解答類型3)が28.7%と、誤答の反応率がそれぞれに高い値を示している。大正から昭和初期の政治・経済・外交などの動向に関する系統的な理解が不足していると考えられ、複雑なこれらの時代を構造的にとらえる学習が不十分であると考えられる。

＜第二次世界大戦後の日本と世界＞

「(7) 第二次世界大戦後の日本と世界」では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、6問中4問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。

石油危機が経済活動に与えた影響に関する理解を問う問題 [A7] (3)] では、設定通過率65%に対して、通過率75.8%と上回っており、公民科の「現代社会」や「政治・経済」との関連も考えられる。

電化製品の写真をみて技術革新が国民に与えた影響に関心をもって考察させる問題 [B7] (3)] は、過去同一問題であり、設定通過率55%に対して、通過率29.0%と、前回調査(通過率34.4%)と同様に通過率が設定通過率を下回っている。また、誤答である「国民生活に与えた影響は書いているが、個別の家族に与えた影響に止まるもの」(解答類型2)の反応率は32.8%と、通過率よりも高い。第二次世界大戦後の対外関係に関する理解を問う問題 [A7] (2)] では、設定通過率55%に対して、通過率43.1%と下回っている。戦後の生活文化に関心をもって考察する力や、対外関係を条約と関連させて考察する力に課題がみられる。

③ 評価の観点別にみた分析

評価の観点別に通過率と設定通過率を比較すると、すべての観点で、設定通過率と同程度以上と考えられる問題が、全体の問題数の半数以上を占めている。

| 評価の観点 | 問題数 | 上回ると考えられるもの | 同程度と考えられるもの | 下回ると考えられるもの |
|------------|-----|-------------|-------------|-------------|
| 関心・意欲・態度 | 10 | 6<60.0%> | 2<20.0%> | 2<20.0%> |
| 思考・判断 | 25 | 10<40.0%> | 8<32.0%> | 7<28.0%> |
| 資料活用の技能・表現 | 15 | 8<53.3%> | 4<26.7%> | 3<20.0%> |
| 知識・理解 | 20 | 8<40.0%> | 6<30.0%> | 6<30.0%> |

(注) 複数の評価の観点にまたがる問題があるため、前記の表の問題合計数と異なる。

日本史Bの「関心・意欲・態度」の観点は、「我が国の歴史の展開に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての責任を果たそうとする」ことを趣旨としている。

「関心・意欲・態度」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、10問中8問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。江戸時代の庶民に読書が普及した背景に関心をもちその理由を資料から読み取って表現させる問題[A4](5)では、設定通過率55%に対して、通過率66.7%、江戸時代の庶民文化について関心をもって課題を設定させる問題[B4](4)では、設定通過率60%に対して、通過率80.5%と上回っており、自分の関心に基づいて主体的・積極的にテーマを選び歴史を考えようとする学習が定着していると考えられる。

「思考・判断」の観点は、「我が国の歴史の展開から課題を見だし、世界史的視野に立って多面的・多角的に考察し我が国の文化と伝統の特色についての認識を深めるとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断する」ことを趣旨としている。

「思考・判断」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、25問中18問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。しかし、第一次世界大戦後の軍縮政策を統計資料に基づいて考察させる問題[A6](1)では、設定通過率55%に対して、通過率37.8%と下回っており、複数の資料から情報を読み取り、知識と関連づけて思考する力に課題があると考えられる。

「資料活用の技能・表現」の観点は、「我が国の歴史の展開に関する諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して歴史的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する」ことを趣旨としている。

「資料活用の技能・表現」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、15問中12問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。絵図や写真の読取りに関する問題は、全問題で通過率が設定通過率を上回っている。しかし、柳生の徳政碑文から徳政一揆のねらいや成果を読み取って農民の立場から表現させる問題[B3](3)では、設定通過率45%に対して、通過率36.0%と下回っており、資料の読み取りの成果を自分の言葉で適切に表現する力に課題があると考えられる。

「知識・理解」の観点は、「我が国の歴史の展開についての基本的な事柄を世界史的視野に立って総合的に理解し、その知識を身に付けている」ことを趣旨としている。

「知識・理解」の観点に関する問題では、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題数は、20問中14問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。しかし、雪舟に関する略年表をみて応仁の乱の影響が文化にまで及んでいたことを読み取らせる問題[A3](4)では、設定通過率60%に対して、通過率36.7%と下回っており、時代の特色を大きくとらえる力に課題があると考えられる。

④ 問題形式別にみた分析

| 問題形式 | 問題数 | 上回ると考えられるもの | 同程度と考えられるもの | 下回ると考えられるもの |
|------|-----|-------------|-------------|-------------|
| 選択式 | 28 | 13<46.4%> | 7<25.0%> | 8<28.6%> |
| 求答式 | 15 | 6<40.0%> | 8<53.3%> | 1<6.7%> |
| 記述式 | 17 | 7<41.2%> | 3<17.6%> | 7<41.2%> |
| 合計 | 60 | 26<43.3%> | 18<30.0%> | 16<26.7%> |

問題形式別に通過率と設定通過率を比較すると、同程度以上と考えられる問題数は、選択式問題が28問中20問、求答式問題が15問中14問、記述式問題が17問中10問であり、すべての問題形式において全体の問題数の半数以上を占めている。

記述式問題については、[A6] (1) , [B3] (3) , [B1] (2) の無解答率がそれぞれ35.4% , 33.1% , 30.1%となっているなど、無解答率が比較的高い問題が多くみられる。また通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題も、他の問題形式よりも割合が高い。

⑤ 前回調査で課題とされた内容との関連

日本史Bでは、現行までの学習指導要領が示しているとおおり、歴史の展開を大きくつかませると同時に、各時代及び全体の理解を通じて、我が国の文化や伝統がどのような特色を持ち、どのように形成されてきたかについての認識を深めることが重視されている。前回調査（平成15年度調査）では、この点に課題のあることが指摘された。

今回調査においても、例えば室町時代全体を政治・経済・社会・文化の流れや動きを視野に入れながら広い視点で大きく総合的にとらえる問題 [A3] (4) で、設定通過率60%に対して、通過率36.7% , [B3] (3) で、設定通過率45%に対して、通過率36.0%と通過率が設定通過率を下回っており、課題であると考えられる。

また前回調査では、近現代史に関する基本的な事柄の理解や、複数の資料の共通点や相違点を考察する力が十分身に付いていない状況がみられたが、今回調査においても、「② 内容項目別にみた分析」「③ 評価の観点別にみた分析」で指摘したように、前回調査と同様の傾向がみられた。

(3) 質問紙調査の結果の概要

① 生徒質問紙調査

「日本史の勉強は大切だ」との質問に対し、肯定的に回答した生徒の割合は60.3%であり、前回調査との比較では肯定的な回答が増加している。また、「日本史を勉強すれば、私は、社会の一員としてよりよい社会を考えることができるようになる」との質問に対し、肯定的に回答した生徒の割合は44.8%であり、否定的な回答とほぼ同程度である。前回調査との比較では、肯定的な回答が約8%増加している。また、「博物館や郷土資料館に行くことが好きですか」との質問に対し、肯定的に回答した生徒の割合は45.5%である。これに対し、「日本史Bの勉強で、学校の図書館などを利用して、資料を集めたり活用したりしていますか」という質問に肯定的に回答した生徒は9.5%である。

学習方法に関する質問では、「日本史Bの授業で、自分の考えたことや調べたことを発表する学習は好きですか」という問いに肯定的に回答した生徒は7.8%で、前回調査と比較するとやや増加傾向であるが、否定的に回答した生徒の割合より低くなっている。また、同質問に対し半数以上の生徒がこうした学習を「ほとんど又はまったく行っていない」と回答している。

日本史の学習に対する生徒の意識等

| 質問事項 | 肯定的な回答の割合 | 否定的な回答の割合 | 分からない | その他 | 無回答 |
|--|------------------|------------------|------------------|----------------|----------------|
| 「日本史の勉強は大切だ」 | 60.3% (55.0%) | 33.7% (36.9%) | 5.4% (7.2%) | 0.1% (0.0%) | 0.5% (0.9%) |
| 「日本史を勉強すれば、私は、社会の一員としてよりよい社会を考えることができるようになる」 | 44.8% (36.5%) | 44.1% (49.9%) | 10.6% (12.7%) | 0.1% (0.0%) | 0.4% (0.9%) |
| 「博物館や郷土資料館に行くことが好きですか」 | 45.5% (44.5%) | 54.0% (54.7%) | --- | 0.0% (0.0%) | 0.4% (0.8%) |
| 「日本史Bの勉強で、学校の図書館などを利用して、資料を集めたり活用したりしていますか」 | 9.5% (8.5%) | 89.9% (90.6%) | --- | 0.1% (0.0%) | 0.5% (0.8%) |

(注) < >内は平成15年度調査結果

| 質問事項 | 肯定的な回答の割合 | 否定的な回答の割合 | ほとんど又はまったく行っていない | その他 | 無回答 |
|--|----------------|------------------|------------------|----------------|----------------|
| 「日本史Bの授業で、自分の考えたことや調べたことを発表する学習は好きですか」 | 7.8% 〈5.8%〉 | 33.3% 〈33.4%〉 | 58.2% 〈59.9%〉 | 0.2% 〈0.1%〉 | 0.6% 〈0.7%〉 |

(注) < >内は平成15年度調査結果

学習内容の項目別の理解に関する質問では、全般的にみて現代に近づくほど「よく分かった」との割合が下がる傾向にある。同一大項目の中で比較すると、「(2) ア 日本文化の黎明」, 「(4) ア 織豊政権と幕藩体制の形成」の中項目についての質問は、他の同一大項目内の他の中項目と比べ「よく分かった」, 「好きだった」との回答の割合がやや高い。

② 教師質問紙調査

「博物館や郷土資料館等の地域にある施設を活用した授業を行っていますか」との質問に肯定的に回答した教師の割合は5.2%である。「学校図書館を活用した授業を行っていますか」, 「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」, 「観察や調査・見学, 体験を取り入れた授業を行っていますか」との質問に肯定的に回答した教師の割合も10%にも満たない。

日本史学習の指導状況

| 質問事項 | 肯定的な回答の割合 | 否定的な回答の割合 | その他 | 無回答 |
|-------------------------------------|-----------------|------------------|----------------|----------------|
| 「博物館や郷土資料館等の地域にある施設を活用した授業を行っていますか」 | 5.2% 〈5.2%〉 | 89.9% 〈92.3%〉 | 0.0% 〈0.4%〉 | 4.9% 〈2.1%〉 |
| 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」 | 4.1% 〈6.6%〉 | 90.8% 〈91.6%〉 | 0.2% 〈0.4%〉 | 4.9% 〈1.5%〉 |
| 「調べたことを発表させる活動を取り入れた授業を行っていますか」 | 7.7% 〈10.5%〉 | 87.0% 〈87.5%〉 | 0.0% 〈0.4%〉 | 5.2% 〈1.7%〉 |
| 「観察や調査・見学, 体験を取り入れた授業を行っていますか」 | 8.3% 〈6.7%〉 | 86.8% 〈91.2%〉 | 0.0% 〈0.6%〉 | 4.9% 〈1.5%〉 |

(注) < >内は平成15年度調査結果

学習内容の項目別に同一大項目の中で比較すると、「(3) イ 武家政権の展開と社会の変化」, 「(4) イ 産業経済の発展と都市や村落の文化」, 「(5) ウ 近代産業の発展と近代文化」, 「(6) イ 政党政治の発展と大衆文化の形成」主に経済や文化を扱う中項目は、他の中項目と比べ「生徒にとって理解しにくい」, 「生徒が興味を持ちにくい」との回答の割合がやや高い。

③ 生徒質問紙調査と教師質問紙調査の比較

学習指導要領の改訂に伴い新たに設けられた大項目「(1) 歴史の考察」をみると、調査時点(第3学年の11月)までの段階で指導をしている教師の割合は、「ア 歴史と資料」が86.5%、「イ 歴史の追究」が69.2%、「ウ 地域社会の歴史と文化」が73.1%である。

学習内容の項目について教師と生徒の意識を比較してみると、「(1) ウ 地域社会の歴史と文化」, 「(4) ア 織豊政権と幕藩体制の形成」の2つの中項目は、「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師の割合がともに高く70%以上であった。このうち「織豊政権と幕藩体制の形成」は「好きだった」と回答した生徒の割合は38.9%と全項目の中で最も高くなっており、教師と生徒の意識の相関を読み取ることができる。これに対し、「地域社会の歴史

と文化」は「好きだった」と回答した生徒の割合は20.8%と高くなく、教師と生徒の意識の違いがある。

「地域社会の歴史と文化」を学ぶ意義の一つに「見学・観察や聞き取りを含めた調査、発表・討論など様々な学習方法により生徒の主體的な学習能力を育成できること」があげられている。上述したように、「博物館や郷土資料館に行くことが好きですか」との質問に肯定的に回答した生徒は45%を超えている反面、こうした施設を活用した授業を行っている教師の割合は約5%である。また、学校図書館を活用した授業、調べたことを発表させる活動を取り入れた授業、観察や調査・見学、体験を取り入れた授業を行っていると回答した教師の割合は10%にも満たない。こうした現状が、「地域社会の歴史と文化」にみられる教師と生徒の意識の違いの一因になっていると考えられる。

今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点

○ 時代の特色を大きくとらえさせる指導の工夫

前回調査でも課題とされたが、今回のペーパーテストの調査結果からも、各時代の特色を大きくとらえる力は十分身に付いていないと考えられる。例えば中世社会の特色を政治・経済・文化の流れや動きを視野に入れながら広い視点で大きく総合的にとらえる問題で、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

学習指導要領でも重視されているように、内容の重点化を図って時代をできるだけ大きく総合的にとらえさせる必要がある。そのためには、我が国の歴史と文化を世界史的な視野に立って理解させる視点、身近な地域から考察させる視点、庶民の動向から考察させる視点など、様々な視点から歴史的事象を多面的・多角的に考察させる必要がある。また、必要以上に細かな内容に深入りせず、それぞれの時代の基礎的・基本的な事象や事項・事柄を通して、我が国の歴史と文化を大きくとらえさせることも重要である。例えば江戸時代における鎖国に関し、対外貿易の完全な断絶ではないという視点から意見を出させ、その根拠の追究を通じて歴史の因果関係を時間軸の中で考察させることにより、近世の対外関係の基本的な枠組みをとらえさせることができる。

○ 近現代史の指導の工夫

ペーパーテストの調査結果から、大項目「(5)近代日本の形成とアジア」と「(7)第二次世界大戦後の日本と世界」において、通過率が設定通過率と同程度以上と考えられる問題が半数以上であったのに対し、「(6)両世界大戦期の日本と世界」においては、前回調査で同程度以上と考えられる問題が全体の問題数の半数以上であったが、今回調査では同程度以上と考えられる問題が半数に満たず、無解答率も高い傾向がみられた。

幕末・明治維新时期については、教師質問紙の「生徒は興味を持ちやすい」との回答割合が、「生徒は興味を持ちにくい」との回答割合を上回っている。

「(6)両世界大戦期の日本と世界」で扱う時代は、民族運動の進展、社会主義国家の成立・全体主義の台頭などを背景とした世界史的動向の中で、我が国の政治・経済・社会・外交などが複雑に関係しながら、戦争に突入していった過程の多面的・多角的な考察と構造的な理解が求められる時代である。生徒にこの時代を大きくとらえさせるために、政治史の区分に従って時代を考察させる学習方法だけでなく、例えば、連続性の高い経済の動きを軸にして、その視点から政治や外交の動きをとらえさせる方法が考えられる。

○ 歴史的事象の考察を通じて知識を定着させる指導の工夫

ペーパーテストの調査結果を評価の観点別に比較すると、「思考・判断」と「知識・理解」の観点の問題に、通過率が設定通過率を下回ると考えられる問題が多い傾向がみられた。

今回のペーパーテストの調査結果では、複数の資料を関連づけて考察させるなどの思

考を要する問題で通過率が低くなる傾向がみられた。

歴史的思考力を育成するには、歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係などを時間軸の中で、多面的・多角的に調べ考えることを通じて歴史を総合的に理解させることが重要である。知識は、体験し見聞したもの、あるいは自ら調査したもののほど深く確実に定着するものである。

例えば、教師が用意した学習課題について、生徒をグループごとに割当て、教科書、図説などで調べさせ、調べ考察した結果の発表をもとに講義を進めるという方法も考えられる。教師とともに学習課題の検証を進める学習活動を通じて、より確実に知識として定着させることができる。

○ 複数の資料を読み取り考察させる指導の工夫

前回調査でも課題とされたが、今回のペーパーテストの調査結果からも、複数の資料を比較し、相違点や共通点を見付け出し、知識と結びつけて考察するという力が定着していない傾向がみられる。資料には、雑誌・新聞なども含めた文献、絵画や地図、写真等の画像、映画や録音などの映像・音声資料、日常の生活用品も含めた遺物や遺跡、景観、地名、習俗、伝承、言語など様々なものがある。それぞれ歴史的資料として異なる特色を持っていることを理解させるとともに、これら複数の資料をさまざまな視点から比較したり、互いの変化を読み取ったり、総合的に考察させる指導が求められる。

例えば、複数の遺物や絵画資料から時代の変化を読み取り、その要因を考察させたり、過去の地図や写真などから現在との違いに気付かせ、その時代の社会的特色を追究させたり、同時代に生きた立場の異なる人物が書き残した資料を比較し、その要因や政治的背景を考察させるなどの指導の工夫が求められる。

○ 表現力を高める指導の工夫

ペーパーテストの調査結果から、資料を読み取り、自分の言葉で適切に表現する力を問う問題で、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。また、質問紙による調査では、「日本史Bの授業で、自分の考えたことや調べたことを発表する学習は好きですか」という質問に対し、そうした学習を「まったく又はほとんど行っていない」という回答が58.2%であった。

歴史学習において表現力を高めるためには、国語力だけではなく、歴史学習によって培われる「言葉の力」に裏付けされるものでなければならない。歴史的事象あるいは歴史用語を理解させ、資料を読み取る技能を基盤としながら、考察させた成果を表現させる学習活動を通じて表現力を高める工夫が必要である。

例えば、継続的に行える指導として、授業の終了前に若干の時間を取り、学習した内容の中から重要な用語をいくつか選び、その用語を使って、学習した内容を指定した字数以内でまとめさせることが考えられる。また、学習した中からいくつかのキーワードを示し、その因果関係を説明させることも考えられる。

○ 生徒の関心・意欲を高める指導の工夫

生徒質問紙の調査結果から、「日本史Bの授業で、テーマを設けて調べる学習は好きですか」との質問に対する肯定的な回答の割合は14.2%と低い。

一方、「博物館や郷土資料館に行くことが好きですか」、「身近な地域の遺跡や文化財(神社・寺院など)を見学するのは好きですか」との質問に肯定的に回答した生徒の割合はそれぞれ45.5%、50.8%である。生徒のこうした興味・関心を踏まえ、教室で学んだ学習内容をこれらの施設で「実物を観たり、触れたり」して「実感する」ことは重要な歴史学習の取り組みとなる。また、生徒の関心や意欲を高めるためには、様々な資料を活用したり、生徒が主体的に活動する調査・発表・意見表明等の場面に授業の中に一層取り入れていくことも求められる。

例えば、生徒にとって身近な生活と関わる「教育(制度など)の変化」、「衣食住の移り

変わり」等に関するテーマを設定して調査活動をさせたり，時事問題等から調査テーマを設け，テーマの背景や推移，結果や影響を調査研究することもできる。その際，単に「調査して発表して終わり」ではなく，できるだけ生徒に「解決すべき課題は何か」という意識を持たせることが大切である。課題解決的な学習を取り入れるなどして，生徒の歴史学習に対する関心や意欲をより高め，主体的に歴史認識を形成させていく指導の工夫が望まれる。